

ら ライバルは世界に探す

「ライバルは世界に探す」とは、我ながら大きくてたもんだ。問題意識をつきつめてみると、そのようなことを考えているのは自分一人ではなく、世界のどこかには同時代を生きる一人として同じようなことを考えている人がいるということだ。これだけ情報の発信や検索が容易になった今は、その誰かに行き着く可能性も大きく広がっている。

都心のまちづくりの方向性について大規模な市民ワークショップをうけて市民意向を把握するプロジェクトを企画したことがあった。それまでの車中心から歩行者中心で環境に配慮したまちづくりを進めることの是非を問うものだった。車への依存度が高いと言われていたまちだったが、実際の都心部へのアクセスは公共交通が主であったことから道路空間の配分も車から人に重点を置こうと行政は考えていた。私はそのための市民議論のいくつかをお手伝いしていたが、一定の方向性が見えてきた段階で警察などの関係機関から慎重論が出て足踏み状態になっていた。都心を利用する主役の市民はどう考えているのか。それを目に見える形で示すにはどうしたら良いかと頭をめぐらしていた。

その時、ニューヨークでグランドゼロの再開発をめぐって千人規模の公聴会が開かれたという新聞の小さな記事に目が止まった。すぐにニューヨークタイムスのデジタル版を購読して調べたところ「Listening to the City」というその取組はなんと四千五百人が参加して行われた大規模ワークショップだったことがわかった。当時、検討されていた複数の再開発プランを市民が討議をつうじて評価するという試みで、結果はどの案もあの悲劇のメモリアル性より、事業採算性に力点を置いた経済優先の再開発だという酷評を得るようになった。計画決定の法的プロセスにもとづく取組ではなかったが、ワークショップの結果を受けて全ての案は白紙になり、市民の意向を組んだ開発が検討されることになったという。その詳細な報告書をネットで入手し読んだ時には「市民の話し合いが社会を動かす」というようなことがあるのだという深い感動を覚えた。そうして企画提案して実施したのが都心のまちづくりを考える市民千人ワークショップだった。